

絵巻紹介

東都大震災過眼録 (紙本淡彩・抄録)

作・萱原白洞

作者萱原竹尾（1896～1951）は香川県綾歌郡山田町生まれ。絵画修業のため、20歳で上京、日本画の山内多門に師事した。東京柏木で関東大震災に罹災（1923年）、当初白洞、後に、黄丘と号した。



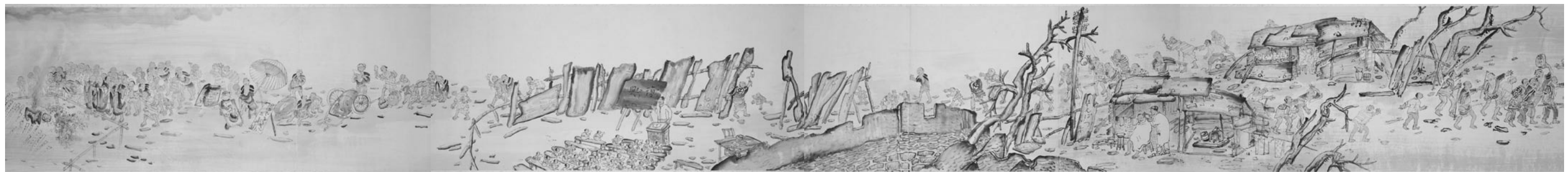
巻一 第1巻（40.4cm×1410cm）：大地震発生（9月1日）で人々が避難する様子を描く。震災当時、第1次大戦後の軽佻浮薄な世相を糺すものとして、地震を天の諫めとする天譴論が唱えられた。作者白洞もまず仏神の怒りとして震

災絵巻を描き起こす。憤怒の不動明王が射る火矢は避難する人々の牽く大八車の荷や布団に取り付き、燃え上がる。その焔で多くの人々が焼死した。しかし、なお、神の怒りは収まらない。



巻二 第2巻（40.4cm×1510cm）：神の怒りはなお収まることなく、火矢が射られた。永代橋も鈴なりの人々とともに崩れ落ち、多くの建物も地震で崩れ、焼かれた。やがて、警官が出動して瓦礫の下になった人々の救出活動を行う。街

は水と食を求めて右往左往する人々で混乱を極めた。戒厳令（9月2日）によって軍隊が治安維持と救出活動に従事。3日朝、漸く火災は収まるが、余震が続き、人々は仮小屋に寝泊りした。



巻三 第3巻（40.4cm×1230cm）：聖観音の出現で漸く平穏が訪れる。避難途中で別れ別れになった親子、兄弟は、名前を書いた板切れなどを掲げて街々を探し回わる。目敏い小商人は西瓜や酒を売りはじめる。一方、町々に設けられ

た自警団は流言に躍らされて朝鮮人を捕らえ、怪しいと睨んだ人物を誰何し、人々の恐怖心を煽った。やがて、学校も再開され落ち着きを取り戻し、悲劇の被服廠では49日の法要が営まれた。

本絵巻3巻は萱原家のご厚意によって、今回はじめて誌上公開されるものです。（文：北原 糸子）